

森谷 俊一 (1975・理工)

C：福島県 スパリゾートハワイアンズコース

未曾有の東日本大震災から約一年半がすぎた。特に地震、津波、原発事故の三つの災禍に見舞われた福島の実状を知りたく「東北応援ツアー」に参加した。

私自身も新潟地震や阪神淡路沖地震等、近くに大きな揺れを感じた機会があったが、直接の被害を受ける事はなかった。今回、いわき市の校友の遠藤さんの被災自宅跡を見させて頂いたり、常磐ハワイアンリゾートホテル支配人の震災当日から復旧までの足跡を聞かせて頂き、その御苦労に頭が下がるとともに、もっと身近に自分の問題課題として捉え、行動することが必要であるとの思いを強くした。

一時“絆”という言葉がもてはやされた。しかし、農水産物の風評被害やガレキ処理に対する一方的な反対運動等、被災地感情を傷つけ、復興を妨げる言動が、マスコミを含め多くなって来ており非常に残念な事であると思う。

家々が流され、基礎だけが残された集落に残るコンクリートの校舎の横にうず高く積まれたガレキの山、子供達の元気な歓声もなく静まりかえっており、まさしく時間が止まってしまっているようで胸が痛む。

また遅々として進まない復旧、復興に対し被災地元の人達が困っているのは、先の見通せない不安だという。この不安の第一は、非難という名のもとで、一家が離散させられ、定住する場所も決まらない現状と思う。まずは安全に定住できる場所を早期に確保し家族の生活基盤作りを支援する。仮設住宅や仮住いの避難生活から脱却することにより、生活設計立てやすく、腰の据わった行動ができるのではと考える。またそれと並行して優先的に実施しなければならないのは除染作業である。国策によるエネルギー政策の原子力活用も、稚拙な政権による人災で放射能汚染を発生させてしまった。まだ手付かずの所も多いと聞くので一行雲早く除染作業を進め、管理された安全地域を確保し、生活の基盤作りを支援してほしい。“福島”が“Happy Island”と呼ばれ、自然豊かな郷土となるよう、切に願っている。